

5. めとる一婚姻一

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

* 親族組織 (kinship) の基礎知識 : 丸 (○) と三角 (△)

- ・ 三つの関係 : 1) 母子 (親子)、2) 婚姻、3) 兄弟姉妹
- ・ 二つの起点 : 1) 先祖 (父系、母系、単系、双系)、2) ego : 父方、母方、双方
- ・ 居住方法 : 1) 父方居住、2) 母方居住、3) 独立居住
- ・ 親族の名前 : 1) 親族名称、2) 親族呼称

* 社会的事実としての「婚姻」: 恋愛／性愛／婚姻の別

* 婚姻の前近代

- ・ 「嫁」という資源 : 生産力と再生産力
- ・ 婚姻のタイプ : 招婿婚 → (足入婚) → 嫁入婚
- ・ 婚姻の決定 (当人、若者組、両家…) / 婚姻儀礼 (結納、嫁入道具、初婿入、祝言)
- ・ 主婦権の移行 (ex. しゃもじわたし)

* 婚姻の近代

- ・ 「近代家族 modern family」の成立
- ・ 婚姻圏の水平的・垂直的拡大 ex. 写真結婚
- ・ 仲介者の重要性の増大、婚礼の華美化
- ・ ロマンティック・ラブ・イデオロギー (恋愛＝性愛＝婚姻)

* 婚姻の現在

- ・ ロマンティック・ラブ・イデオロギーの「動揺」と「形式的持続」
- ・ 「婚活」の時代 : 「三高」から「三低」へ
- ・ 「非婚」の時代 : 生涯未婚率の増加
- ・ 「結婚≡生存」時代の終焉! ?

=文献=

柳田国男 1931 「恋愛技術の消長」『明治大正史世相篇』朝日新聞社

柳田国男・大間知篤三 1937 『婚姻習俗語彙』民間伝承の会

瀬川清子 2006 (初出 1957) 『婚姻覚書』講談社学術文庫

赤松啓介 2004 『夜這いの民俗学・夜這いの性愛論』ちくま学芸文庫

小倉千代子 2007 (初出 2003) 『結婚の条件』朝日文庫

山田昌弘・白河桃子 2008 『「婚活」時代』ディスカバー携書

林典子 2014 『キルギスの誘拐結婚』ナショナル・ジオグラフィック社

永田夏来 2017 『生涯未婚時代』イースト新書

した。一つは、石川県の能登半島の北方に浮んだ鮎倉島の海女である。此処では、一家を支えるのは殆んど女の潜水労働によるそうで、颯爽と海にとび込む海女の勇敢な写真や解説が新聞に出たので、私は三界に家のない婦人の中にも、そういう潑刺とした婦人のいる事を、実際に見たくなつたのである。もう一つは当時有名になつた岐阜県飛騨の白川村の大家族の中の婦人達である。此処では、長男以外の次男・三男の妻は、生涯生れた家に居つて働き、生んだ子供も妻の家で育てる。一生の間、夫婦・親子が同じ屋根の下で暮らす事を許されない、と聞いたのである。女とは云いながら、そんなにまで、自我のない生涯に甘んじて居られるものか、その婦人達は全くの奴隷か、さもなければ、婚姻生活と経済生活を全然別々のものと考えている、非常に太い神經の持主であるかも知れない、というふうに想像して、この山と海の二群の婦人の生活に、親しく触れてみたい、と熱望したのである。飛騨の白川村も、当時の新聞を賑わした話題であつた。夏休みを利用してとにかく鮎倉島に行つたのである。

鮎倉の海女は、今では映画にもなつて一般に知られているが、本拠は石川県輪島町にあつて、戸数は三百戸足らずであるが、夏、四カ月の間が、この人達の鮎や海藻の取入れ時で、北方の日本海の孤島、鮎倉島に全村移住するのである。この村の主業は、寒天の材料になるエゴという海藻や鮎を採取する事で、それがどちらも海女――

女の潜水作業でとるのである。お天気の良い日には、男女一舟で沖に出て海女が海底に沈んで鮎やエゴをとると、男が舟上に居て、海女の腰綱を引き上げてやるのである。こうした日の一日の収入の分配は、男四割、女六割であつた。この労賃の相場は、この島ばかりではなく、何処の海女の村も同様らしく、長門の大浦では、三つの鮎を並べて、海女が大きい二つをとつたという。沖が荒れると、舟を出せないで、夏四カ月の間島に居ても、男女一組で本式の漁をする日は四十日しかないそうで、他の日は凡て海女だけが、海岸に近い所に鹽を浮べてモグリをするのである。そういう日の男達は、何の仕事もないから、父親も若い者も、あちらこちらに集つて烟草を吸つて、漫談をして居た。此処では男閨白の位と云つて、男は、村の相談ごとに出たり、商人と交渉したり、いわば村の政治方面を受持つているだけで、威張つてお酒を飲んで暮せるところだ、と海女達は笑つて説明する。男もトロール船に頼まれて鱒漁に出たり、鯛釣りに出たりするが、その収入は至つて少なく、一家の経済はやはり妻や娘の潜水作業や灘廻りの収入が主なのである。灘廻りというのは、エゴや鮎のように共同販売の出来ない雑物を塩漬にして置いて、秋、輪島に帰つてから、能登半島の沿岸を舟で廻つて、農家と物々交換をすることで、一年の飯米は、これで調達せられるのであつたが、この商もまた婦人の仕事なのである。実によく女の働く村である

が、こういう村の婚姻がどんな風であるか、ということが問題なのである。鮎倉島という資源は一村の共有で、その点恵まれて居るが、家に婦人がなければ、磯の口が明いても潜る人がないので収入がないわけである。だから、母と嫁と孫娘三代の間に、十年の隙があれば――つまり家に女の働き手のないような期間が出来る、と予想すれば、灘廻りの時に、貧農の女の子を貰つて来て、モグリを仕込んだという位であるから、この村で暮そうと思ふ男子は、必ず村内の海女のできる婦人をめとらなければならぬ。しかも潜水作業には能率の甲乙があつて、一年に百貫(一貫は三・七五キログラム)あげる海女もあれば三、四十貫しか揚げかねるものもあるという。島の娘達は、

い。ここは、嫁さん貰うにも、金持同志貰わんとこや、働きのよい海女を貰うさかい。

と云う、どんな人と結婚するかと聞くと、

島の男は、腕といつても皆同じい故、やはり顔や背丈がようて、憎らしゅうない

がええ。

と云つて居る。力の觀念が男女でん倒しているから当然のことであるが、都會の男子の嫁扱みの意見と似たようなことを女の側からきいて苦笑させられた。普通二十歳前後に、若い者同志の間で婚約をするそうであるが、それで親の反対がなければ、両方の親と親との間で、娘の年季を決めて、長くて三、四年、短くて一年の間娘を生家の為に働かせてから、夫の家に引移りをさせるといふ契約をする。年季の間は古風な、「源氏物語」の光源氏の君のようなつまどいで、生れた一人・二人の子供も、妻の里で育てられるのである。近頃鮎もあまり採れなくなつたので、娘達は、

ん。年季や云うても、子供が二人も出来て、子守りを頼んでは、親の家のためになら

と、話して居た。海女は、二十五歳から三十歳までが、最も体力が旺んで、欲も張り、手も利くそうであるから、その村の生活にとつては、年季は重大な婚姻制度だったのである。嫁の引移りは、多く盆祭の時に行われるというが、是は結婚式と云つ